

## 外国人留学生の書いた日本語作文の分析 その4 －ベトナムからの留学生の場合 2－

馬場 良二（日本語教育）

この作文を書いたのは、ハノイ国家大学外国語大学日本語科3年の女子学生で、2008年の4月から1年間、熊本の大学に所属していました。この大学には、ここ4、5年ベトナムからの交換留学生が来ています。3、4年前の留学生にベトナム戦争のことを聞くと、何も知らない、昔のことだからとこたえました。それでも、親戚で亡くなった人は一人ならずいるようでした。

### 表記／形

この学習者はひらがなの「か、が」、それに漢字の「力」の右角をとがらせる特徴があります。1ページ1行目の<sup>カ</sup>、同3行目の<sup>カ</sup>、17行目の<sup>カ</sup>、18行目の<sup>ガ</sup>、5行目の<sup>カ</sup>「力」などがそうです。あまりとがっていないものには、1ページ9行目の<sup>ガ</sup>や14行目の<sup>カ</sup>「力」などがあります。1ページ19行目の<sup>カ</sup>のように、とくにとがっていないものもあります。

「ま、は、よ、な」のように上からおりてきてくると右回りするひらがなは全部、1ページ9行目の<sup>ま</sup>、最終行の<sup>は</sup>、2ページ7行目の<sup>よ</sup>、1ページ16行目「文化的な」の<sup>な</sup>などのように、くるんのあとが右になびいています。過去のベトナムからの学生の作文を見なおしましたが、こうなってはいませんでした。個人的な書き癖のようです。

タイ語の表記に使われている文字は13世紀にインド系の文字から作られたと言われています。文字の最後が丸まっている特徴があり、タイからの留学生は日本語のひらがなの最後も丸めてしまう傾向があります。「わ」が「ね」に、「ろ」が「る」、「め」が「ぬ」になってしまうのです。しかし、ベトナムはアルファベットを使っていて、ベトナムの文字にとくに最後をなびかせる特徴はありません。

2ページ18行目の<sup>な</sup>は「む」のように見えます。「な」を構成する各画のバランスが悪いのです。

1ページ13行目の<sup>ん</sup>、最終行の<sup>ん</sup>、また、3ページ1行目の<sup>わ</sup>、16行目の

日本語を勉強するとき、かけ。

グエンチィ、チャン

私は子供の頃から日本に興味を持っています。日本の伝統的な文化だけでなく、私は日本人の考え方と努力に関心があります。だから、日本について更に知るのに、言語を通して勉強するのが一番だと思っています。

小さい時、私は日本の「おしん」という映画を見ました。その映画は日本中で戦争があった時期について作られました。映画の中の人物が着物を着たり、下駄を入ったりしました。私はそういう物が大好きでした。しかし、一番私が印象を写えられたのは日本人の暮らしかたや努力でした。日本人の挨拶の「おいさ」や座り方からして、イトナリと違っていました。その時の私にとって、そんな文化的なことはとてもおもしろかったです。

以上に私が言うように、私は日本人に感心を持っています。日本は地震が多い国だと言われています。そして、日本は自然に恵まれ

りなど、「れ、わ」の第2画が縦棒にからみついでいません。

1ページ5行目の<sup>ん</sup>や13行目の<sup>え</sup>、14行目の「おじぎや」の<sup>や</sup>や3ページ5行目の<sup>や</sup>、1ページ11行目の<sup>た</sup>や2ページ12行目の<sup>た</sup>など、誤字だとは思いますが、形が落ち着きません。

1ページ9行目の<sup>単</sup>では、「単」の横棒が「戈」の横棒とつながっているように見えます。でも、2ページ2行目の<sup>単</sup>を見ると、はっきり切れて、別の画となっていることがわかります。

1ページ20行目の<sup>恵</sup>では、「由」の縦棒が「日」の中の横棒をつきぬけていません。そのように覚えているのか、たまたまつきぬけなかっただけなのか。2ページ3行目の<sup>風</sup>は、「几」の中の第1画の「ノ」があるのかないのか、はっきりしません。2ページ15行目の「向上」の<sup>向</sup>は、「同」「感」などと混同したのでしょうか、「口」の上に「一」がおかれています。3ページの最初の行の<sup>年</sup>は、「土」が「一」になっており、1画たりないために「さいわい」が「からい」になってしまっています。4ページ1行目の「重視」の<sup>重</sup>は、「日」となっているのか、「口」だけなのかははっきりしません。その下には横棒が2本なくてはなりません、1本しか書かれていません。

ベトナムは「南越」とも言われるように、中国文化の影響が大きく、ベトナム語には日本語同様に漢語が多く取り入れられています。でも、漢字教育はすでに行われておらず、漢字は不得意のようです。

2ページ16行目の<sup>々</sup>の右肩の「×」は何か本人に聞いたところ、単なる消し忘れだそうです。

## 表記／音声

1ページ11行目に「下駄を入ったり」とあります。まずこれは漢字が違います。下駄は「履く」ものであって、「入る」ものではありません。そして、「はく」は「たり」に接続するとき、イ音便をおこして「はいたり」となり、「はいたり」とはなりません。

漢字を間違えた根底には、「はいたり」と「はいたり」とを音声として区別できないという事情があるのかもしれませんが。ベトナム語も、中国語、韓国語、英語、ドイツ語、フランス語などと同様、子音の長さで語の意味の区別をすることがありません。一方、「はいたり」と「はいたり」とを音声記号で書き表すと[haitari]と[haittari]

る国ではあります。30、40年ぐらいい前に、日本  
も戦争のせいで苦しかったのですが短い間に、  
こんな風に早く発展して行きます。現代世界中  
で経済的に2位です。どうやって日本が困っ  
た時期を越えて、発展できるか、私はさんざ  
ん考えていました。しかし、今はもう答え  
が分かりました。それは日本トによると思  
います。

日本人は世界中、親切でまじめな人たちだ  
と知られています。戦争の後、日本人は熱心  
に働き続けたり、努力して、親しい技術を研  
究したりしました。経済を発展させるの始祖  
としました。そして、日本人はついに成功し  
ました。私はどちらかといえば、日本人の努  
力と向上心に非常に感心しています。だから、  
子供の時から、私の夢は一度日本へ来て、日  
本で勉強したり暮らしたりすることです。た  
から、私は日本語を勉強することに決ま  
りました。それはたぶん日本へ来るための一番短い  
道だと思いました。熱心に勉強するのなら、私

で、その物理的な違いは子音 [t] の長さです。子音が長いか短いかを弁別することができないため、「はいたり」を「はいたり」と表記してしまったのでしょう。

### 表記／漢字

3 ページの最終行の「日本言吾教育」ですが、表記での誤りというより、原稿用紙の使い方の問題かもしれません。「語」の偏と旁をそれぞれ別のマスに入れてしまったのです。

同じ3 ページの下から2 行目、「日本語を考える学校」をこの作文を書いた学生に音読してもらくと、「おしえる」と読みました。「教」の漢字の傍の部分だけを取りだし、それが「考」と似ていたために間違えたのでしょう。

### 表記／数字

2 ページの最初の行、「3040 年ぐらい前に、」。このままでは「さんぜんよんじゅう」と読まれかねません。日本語の習慣では「さんしじゅうねん」と言うのではないのでしょうか。最近では「さんよんじゅうねん」という言い方もされているようです。これをそのまま文字化すると「3、40 年」となるでしょうが、これでは見ても理解できません。日本語の数字の場合、表記を見てそのまま読み上げればそれでいい、とはならないことがあるのです。表記では「30、40 年」くらいが適当でしょう。

3 ページ下から3 行目「3 4 年」、このままでは「さんじゅうよねん」としか読めません。文脈から、言いたいのは「さんよねん」であることがわかります。「3、4 年」と書けばよいでしょう。

4 ページ2 行目の「4 年5 年」ですが、本人の音読は「よん、ごねん」でした。「よねん、ごねん」と読まなかったのはすばらしいことです。日本語の習慣としては「しごねん（4、5 年）」と言うべきでしょう。

日本語にかぎらずどの言語の教育でも、数字は重要です。日本語教育でも必ず教えます。ただ、「30 年から40 年ぐらい」のことを「さんしじゅうねん」、「4 年か5 年ぐらい」のことを「しごねん」と言う、というのは体系的には教えません。出てきたときに、「しごねん」と言うんだ、「さんしじゅうねん」と言うんだと教えていくぐらいです。

日本語の数字の言い方は、「15」は「じゅう ご」、「20」は「に じゅう」とかなり単純です。英語のように「11」が「eleven」で「12」は「twelve」などというように不規則ではありません。フランス語では、「80」は「20 が4 つ (quatre-vingts)」、

は日本人留学することかできるのです。幸わ  
いたことに、その夢は現実にたりました。そ  
して、私は毎日日本の文化に触れたり、日本  
人に会って話したりすることかできます。確  
かに、日本の文化や日本人の考え方は私が見  
た映画のと同じです。

もう一つの理由で私は日本語を勉強したの  
です。ここ数年、日本はバトナリに投資し続  
けてきています。また、昨年日本は一番大き  
なバトナリに投資する国にたりました。たか  
ら、バトナリでは今日本の工場や会社かたん  
たん増えします。それにより、日本語か  
できる人が有能です。日本語を勉強する学  
生たちが卒業してから、全員かすぐにいい仕事  
を見つけることかできるし、自分の能力に応  
じて、給料か払われてます。たから、日本語  
は今バトナリ人にたくさん人気かあります。  
ここ3年、大学たけたく、高等学校や中  
学校まで日本語を考える学校か設立されて  
きています。日本語教育はバトナリでは今

「95」は「20が4つと15 (quatre-vingt-quinze)」などと複雑です。ところが、日本語の数字の読み方は単純ではありません。習慣的な場合があり、その習慣的な読みそのまま書くと、誤解を与えてしまうことがあります。表記の仕方には工夫がいらいます。

## 表記／語句

1 ページ13行目に「一番私が印象を写えられたのは日本人の暮らし方や努力でした」とあります。音読では「あたえる」と読んだので、「印象を与えられたのは」と書きたかったのでしょう。字形が似ていて、書き間違えたものと思われる。ただ、「写」を「与」と書いてあったとしても、日本語自体が不自然です。「印象を与える」という言い回しはごく普通でよく使われるのですが、その場合、「強い」とか「さわやかな」といった「印象」を修飾する言語要素が必要です。また、ここではガ格の「私」を受ける形で「与える」を受身にしていますが、それよりは能動形の「受ける」のほうがわかりやすいでしょう。「一番私が強い印象を受けたのは日本人の暮らし方や努力でした」と訂正しました。

## 語句

1 ページ下から3行目「以上に私が言ったように」、まさに言いたいことをそのまま日本語にしたのだと思います。文法にかなった文ですが、直訳調で日本語らしくありません。普通の日本語なら「以上のように」だけでしょう。原文を生かすなら、「以上に私が言ったように」のままでもいいと思います。「以上に」よりは「以上、」のほうが耳になじむような気もしますが、どうでしょう。

同じ1ページの下から3行目「私は日本人に感心を持っています」ですが、「関心を持つ」か「感心している」のどちらかだと思います。書いた本人に聞いてみると、「admire」だそうなので、「感心している」に訂正しました。

2 ページ4行目の「どうやって日本が困った時期を越えて、発展できるのか、」。「困った時期を越え」で意味はわかりますが、国情に関して「困った時期」とは言いません。「困難な時期」でしょう。また、困った時期とか困難とかは「こえる」のではなく「のりこえる」と言うことになっています。

同じ行に「私はさんざん考えていました」とあります。書いた本人は「たくさん」とか「一生懸命」という意味で「さんざん」を使ったと言うのですが、三省堂『新明解国語辞典 第四版』1991、を見ると、

これと重視されています。ニュースによれば、  
イギリスは去年4年5年、イギリスは東南ア  
シアの地域で一位になります。日本語を勉強  
する人の数についてだそうです。だから、た  
ぶん私が日本語を勉強するのが一番です。  
以上の二つの理由で私が日本語を勉強する  
ことにしました。そして、今私は自分の選択  
に満足しています。

さんざん 【散散】<sup>二</sup> (副) (マイナスの) 程度が一通りではないことを表わす。  
「人に－めんどうを掛けておいて・－な目に会った・－ [=ひどく] 待たせる・  
－ [=思いきり] 遊びまわる」

とあります。「程度が一通りではない」というのは書いた意図にあっているのですが、「(マイナスの) 程度」というところが違っていました。「さんざん迷った挙句、アメリカ留学をあきらめた」などの例をあげて説明すると、「マイナスイメージの語だと知らなかった」ということでした。

2 ページ 12 行目の「経済を発展させるのを狙っていました。」は、このままでも言いたいことはわかります。ですが、「ねらう」は「かまえる」ところまでしか意味しません。目標に向かってすすんでいることまで意味するには「めざす」のほうがいいでしょう。

14 行目の「私はどちらかというと、日本人の努力と向上心に非常に感心しています」の「どちらかという」とは「なんとなく」の意味で使ったようですが、いらないでしょう。「なんとなく」では、うしろに来る「非常に」と意味が矛盾します。

2 ページの下から 3 行目、「私は日本語を勉強することになりました」。自分の意志で結婚する場合でさえ、案内状には「結婚することになりました」と書くのが日本の文化です。でも、この場合は、ことの成り行きで「勉強することになった」のではなく、自分の意志、希望であることがはっきりしているので、「しました」にすべきです。

同じページの下から 2 行目、「日本へ来るための一番短い道だと思いました」の「短い道」ですが、ベトナム語ではそういうのでしょうか。英語の「shortcut」ですね。日本語では「はやい道」です。

2 ページ 3 行目の「現代世界中で経済的に 2 位です」は、このままだと世界中のどこでも経済的に 2 位だということになってしまいます。言いたいのはそうではなくて、「世界で 2 位だ」ということのはずです。また、「現代世界中」というのも見慣れません。「現代世界で」か、あるいは、「現在、世界で」とすればいいでしょう。

同じ 2 ページ、9 行目には「日本人は世界中、親切でまじめな人たちだと知られています」という文があります。「じゅう (中)」がつくと、「一日中いそがしい」とか「一年中営業している」などのように、「－中」のあとに助詞をとりません。しかし、それは時間の「じゅう」であって、空間の「じゅう」の場合は、助詞をとったほうが文意がわかりやすいようです。「世界中で」としたほうがいいでしょう。

この学生は、「世界中」と言ってくれましたが、本当でしょうか。第二次世界大戦のときの記憶はまだ消えていません。日本はアジアの多くの国々に大きな被害を負わせました。とても「日本人は世界中で親切でまじめな人たちだと知られている」とは思えません。

「困った／困難」、「越える／のりこえる」、「さんざん／一生懸命」、「ねらう／目指す」などの語句の使い分けは微妙です。物理的、具体的な意味内容はだいたい同じなのですが、使う場面やその語の持つイメージがそれぞれ異なります。このニュアンスの違いは日本語話者にとっても意識しづらく、それでいて、日本語学習者たちが身につけなくてはならないものです。

### 接続詞／接続助詞

1 ページ4行目の「日本の伝統的な文化だけでなく、私は日本人の考え方や努力に関心があります。だから、日本について更に知るのに、言語を通して勉強するのが一番だと思っています。」の「だから」ですが、この「だから」がむすんでいる二文は原因、理由の関係にあるのでしょうか。本人に聞くと、「関心があるから日本の文化についてもっと知りたくて、そのためには日本語を勉強するのが一番だと思っています」と言いたいのだとわかりました。「だから、日本について更に知りたと思っています。他の国の文化を知るには、言語を通して勉強するのが一番だと思っています。」と訂正しました。

2 ページ一番下の「熱心に勉強するなら、私は日本へ留学することができるのです」は、「勉強するなら」より「勉強すれば」のほうがいいだろうと思います。

グループ・ジャマシイ著『日本語文型事典』1998、の「なら」の項を見ると、「郵便局に行くなら、この手紙を出してきてくれますか」「あなたがそんなに反対するならあきらめます」などの例とともに「述語の辞書形・タ形を受け、「実情・状況がそのようであれば」という意味を表す」という記述があります。日本語教育の初級では、接続助詞の「と」「たら」「ば」「なら」の使い分けは一つの山となっていて、このうちの「なら」は「実情・状況がそのようであれば」という意味で、前件がすでに実現している場面での用法を典型的なものとして教えることが多いようです。この著者も、「今すでに勉強しているのだから」ということで、「なら」を選んだのでしょう。しかし、郵便局へ行く例とこの日本留学の文とは趣が異なります。後者には、やはり前件が成立すればという仮定的なニュアンスが必要でしょう。

「ば」は『日本語文型事典』に、「手術をすれば助かるでしょう」「こんなに安ければ、きっとたくさん売れると思う」などのように「特定の事物・人物について「Xが成り立てばYが成り立つ」という関係を表す」とあります。前件が後件の成立の充分条件である用法が典型です。「今の調子で勉強していれば、必ず留学のチャンスはおとずれる」という気持ちがあるのでしょうか、「熱心に勉強すれば、私は日本へ留学することができるのです」としたほうが著者の気持ちがよく表せるでしょう。

## テンス／アスペクト

ここでは、過去の助動詞の「た」がつくつかつかないかをテンス、そして、接続助詞の「て」を介して補助動詞の「いる」がつくつかつかないかをアスペクトという概念でとらえています。

1 ページ3行目「私は子供の頃から日本に興味を持っています」は「持っていました」に訂正しました。この一文だけで考えるなら、「持っています」でもかまいません。「今、日本に興味を持っていて、それは子供の頃からだ」という意味になります。でも、興味を持ち始めたときが古く、それ以来ずっとという気持ちをこめたいのなら「持っていました」のほうがふさわしいでしょう。「子供の頃からずっと今でも」という一つの事象、事実であってもどこに視点をおくかによって言語形式が変わってくるのです。

2 ページ4行目「どうやって日本が困った時期を越えて、発展できるのか、」とありますが、「困った時期を越えて発展」したのはすぎさった過去のことですから「発展できた」でなくてはなりません。

同様に、2 ページの下から5行目「私の夢は一度日本へ来て、日本で勉強したり暮らしたりすることです」ですが、夢はもう実現したのだから、「私の夢は一度日本へ来て、日本で勉強したり暮らしたりすることでした」とすべきです。

1 ページ9行目「その映画は日本中で戦争があった時期について作られました」。「作られました」だと、その前の文「小さな時、私は日本の「おしん」と言う映画を見ました」の示すことから「映画を見たこと」と「その映画が戦争があった時期について作られたこと」ということがらとがそれぞれ過去のある時点において実現されたことを示すだけで、二つのことがらの関連が示されません。映画を見たという過去の経験を示し、次にその映画の特徴について記述する、という構成だととらえると、「その映画は日本中で戦争があった時期について作られています」がふさわし

いでしょう。「その映画」が、「日本中で戦争があった時期について作られている」ことに時の流れは関係がないからです。

次の10行目「映画の中での人物が着物を着たり、下駄を入ったりしました」は、「着物を着たり、下駄をはいたり」という動作をした、という意味でしかありません。そうではなくて、映画の中で着物を着た状態、あるいは、下駄をはいた状態でいたのだと思います。この場合は、「ている」を加えて「映画の中での人物が着物を着たり、下駄をはいたりしていました」とすべきです。

1ページの一歩下、「日本は自然に恵まれる国ではあります」。日本語の動詞には、「帽子の似合う人」「英語のできる通訳」「余裕のあるとき」などその動詞だけでものごとの性質や状態を示すことのできるものがありますが、「めぐまれる」はそのままで性質・状態を表せません。「ている」をとるか、夕形にするかして、「めぐまれている」か「めぐまれた」としなければなりません。

この学習者は優秀で、「ーてきています」という表現を2か所で使っています。3ページ、13行目の「ここ数年、日本はベトナムに投資し続けてきています」と3ページ、下から3行目の「ここ34年、大学だけでなく、高等学校や中学校までも日本語を考える学校が設立されてきています」です。一つの動詞に「ーてくる」と「ーている」をつなげる高等技術だと言えます。ただ、いささか冗長な感はいなめません。訂正する必要はないかもしれませんが、添削する側は「投資し続けている」「設立されている」で充分であることを認識しておくべきでしょう。

優秀であり、「ーている」を使いこなしているのに、2ページ、5行目で「私はさんざん考えていました」としました。「考えました」でなければならないところです。なんで間違えたのか、わかりません。

## 文法

1ページ14行目の「日本人の挨拶のおじぎや座り方からして、ベトナムと違っていました」ですが、『日本語文型事典』によると、この「ーからして」は、「極端な例や典型的な例示を示して、「それでさえそうなのだから、ましてほかのものは言うまでもない」という気持ちを表すのに用いる」そうです。すべてが違って、おじぎや座り方さえも違って、と言いたいことがよくわかります。この作文のように上手に使うと、表現がぐっと日本語らしくなります。

作文タイトルの「日本語を勉強するきっかけ」は、意味はわかりますが日本語と

して物足りません。「きっかけ」というのは何かしらの変化についていうことですから、「日本語を勉強するようになったきっかけ」とすると形がととのいます。

1 ページ 10 行目「映画の中での人物が着物を着たり、下駄を入ったりしました」。「友達へ手紙を書く」だったら「友達への手紙」、「母と約束をする」だったら「母との約束」などのように、名詞修飾の場合格助詞が二つ並ぶことがあります。だから、「映画の中で人物が着物を着た」から「映画の中での人物」としたのでしょう。ですが、なんとなく落ち着きが悪く、「映画の中の人物が着物を着たり、下駄を入ったりしました」としたいところです。

そもそも格助詞をともなった名詞句すべてが「の」をとって連体修飾句を形作るわけではありません。「友達に手紙を書く」とは言えても、「友達にの手紙」とは言えません。「名詞+に」に「の」はつかないのです。また、「名詞+がの」も「名詞+をの」もありえません。では、なぜ「映画の中での人物」が落ち着かないのでしょうか。「体育館でのコンサート」も「国内での選抜」も問題がないのに。いろいろ考えましたが、結論は出ませんでした。

1 ページの最後の行「日本は自然に恵まれる国ではあります」の「恵まれる国ではあります」は、「名詞+です」に「は」がはさまれている形式です。助詞「は」の用法には、大きく主題の提示と対比とがあり、この「は」は対比の用法です。ですが、「恵まれる国ではある」に対比される「-ではない」ものが文章にありません。この「は」は不用です。なぜここに入れたのかわかりません。

作文の最後に「以上の二つの理由で私が日本語を勉強することにしました」とあります。助詞の「が」というのは新しい情報を提示するときに使われるのですが、この作文を読んでも、ここで「私」が新情報であることを示す文脈がありません。「私は」ならあってもいいですが、基本的に日本語では、意味が通じない場合をのぞいて「私」をいれてはいけない<sup>註</sup>、入れるなら文頭に持ってきて「私は、以上の二つの理由で日本語を勉強することにしました」とすべきです。

4 ページ最初、「ニュースによると、ベトナムはあと 4 年 5 年、ベトナムは東南アジアの地域で一位になります」。「4 年 5 年、」では舌足らずで、「カップラーメンは 3 分でできる」「あと 1 か月で二十歳です」などの期限を示す「で」が必要です。また、なぜ 2 度も「ベトナム」と書き入れたのでしょうか。祖国の未来のことが自分のこととして気にかかるからでしょうか。「で」をいれ、二つ目の「ベトナムは」を削除し、「ニュースによると、ベトナムはあと 4、5 年で東南アジアの地域で一位にな

ります」とするとすっきりわかりやすくなります。

注 拙文「英文和訳の日本語力－熊本県立大学の学生の場合」『熊本県立大学文学部紀要』2006、「英文和訳における人称代名詞と取り立て助詞の「ハ」」『熊本県立大学文学部紀要』2007、参照のこと。